

○令和7年度切れ目ない支援体制整備充実事業 山形県立鶴岡高等養護学校公開研修会  
講演記録

○日 時：令和7年12月12日（金）13：30～15：30

○会 場：山形県立鶴岡養護学校 音楽室

## 演題『特別支援学校における総合的な探究の時間』

講師 山形大学 学術研究院 教授 野口 徹 氏

### 1 学校研究の取り組みについて

- ・学校教育目標、めざす生徒像などから、鶴高養の設立趣旨は、知的障がいのある生徒達が就労を目指す教育課程を履修し、学んだことをステップにして、その後の人生を力強く進めていくことにあると思えた。研究主題のとおり、「自ら気づき考えて行動する生徒」の育成や、深い学びにつながる総合的な探究の時間の授業づくりを目指して取り組んでいる。
- ・研究日より（3年生の取り組み）に、「自ら気づき考えて行動する」生徒のめざす姿として、社会人セミナーⅡでは、「目標達成のために考え行動する」「自分からアドバイスを求める」「自分から準備する」「必要なものを考える」「先を考える」「分かったことを次に生かす」「自分の考えを相手に伝える」を挙げている。社会人にとって大事な「報連相」の第一歩として気付くように取り組む意図が伺えた。福祉課や相談支援センターを訪問し、社会に出て問題に直面した時にどこに相談し、どんな方達と話すのか自分達で知りに行く。自分の将来像をイメージして考え行動し、気付いたことを付箋紙で、ワークシートに整理している。
- ・総合的な探究の時間の年間指導計画では、1学年は、「自分の進路を考えよう」の内容を4月から来年の2月まで計画している。1年間で将来のことを考えるタイミングが何回もあり、仕事の内容、先輩の話、仕事の様子などを具体的に体験して学んでいる。また、職場見学を通して、気付いたことを一人一人カードに言語化し、友達と比較や分類をして自分達で気付けるように取り組んでいる。
- ・2学年は、1学年での経験をベースとしつつ、それをどうやって継続するか、そのために自分の課題は何かを見つめていく取り組みである。高校1年生から自分の将来を具体的に見据える内容になっている。
- ・3年間イギリスで生活した自身の経験から、環境が変わると今までできていたことが通用せず能力が発揮できないことを痛感した。職場に就職し働くことは、能力が発揮できるか不安があるもの。何かを知ることによってそれができるというほど甘くはなく、自分の中で咀嚼して使いこなす必要がある。使いこなす自信が出てくると堂々と生活できる。そこが、鶴高養でも大事にしている、`自分で気づいて、という部分なのだと思う。

### 2 学習指導要領から ～総合的な探究の時間について～

- ・平成28年の教育課程部会中教審の資料に、「知的障害のある児童生徒等の学習上の特性等」が示され、「実際の・具体的な内容の指導が必要である」と書かれており、具体的な活動を経て身に着けていくことが望ましいと読み取れる。

- ・教育課程の編成について、「第4章総合的な探究の時間において、準ずるものとしている高等学校学習指導要領 第4章の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする。」とあり、教育課程は必ず総合的な学習（探究）の時間と関連したものにす、また学校の教育目標と総合の目標をきちんと重ね合わせることが示されている。
- ・「生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階を考慮して」とあるが、「教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする」と書かれており、生活の場面で国語や数学、体育、美術などを組み合わせて使える資質能力を育成するという考えは、特別支援学校も一般の学校も同様である。教科を横断した資質能力を育成するために、「総合的な探究の時間」が学校の中心にある必要がある。
- ・学習指導要領に、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を行うことが書いてある。成功体験を積んでいくと「主体性」が伸びる可能性がある。「対話的」は知的障がいの子もたちがコミュニケーション力を身につけて、先輩の話を聞いたり職場で働いている人と話したりすることに繋がる。このように「主体的・対話的」はイメージしやすい。「深い」とはどういうことか。「主体的・対話的」は手段。「深い」は質の問題なので意味が違う。どういう探究をしたかによって、深さが決まってくる。
- ・「総合的な探究の時間」の目標は、特別支援学校高等部学習指導要領第4章に、「高等学校学習指導要領第4章に示すものに準ずる」とある。プラスして、生徒達の状況によって内容を選別するなど、特別支援学校での配慮事項が示されている。
- ・高等学校は、「総合的な学習の時間」から「総合的な探究の時間」と名称が変わった。目標は、「探究の見方・考え方を働かせ」から始まり、これは小・中学校の「探究的な見方・考え方」とは違う。小・中学校の総合的な学習の時間では、自分の身近な暮らしを学習の対象にしているのに対し、高等学校の探究では、自分の身近な暮らしだけでなく、自分自身も学習の対象になる。自分と自分の暮らしとを結びつけた時に、何を問題として見つけてくるか。自分自身をターゲットにするために、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することが能力として求められている。
- ・目標（2）に、「実社会や実生活と自己との関わりから問いを見出し」とある。自分のできなさや足りなさ、自信を持ちたいと思うなど、自分の身近な生活や社会との関わりで、「これをやらなきゃ」「自分でやらなきゃ」と進めてもらいたい。鶴高養の研究主題にある、「自分で気づく」は、こことリンクしている。これは、特別支援学校だけでなく、日本中の高校生にとって大事なことと言える。

### 3 学習指導要領から ～探究が高度化し自律的に行われること～

- ・小・中学校の「探究的」から「的」が抜けたのは、高校の探究は、『高度化で自律的』であり、小・中学校とはレベルの違うものやっていると。探究の過程が『高度化』だ、ということは、次の4つの部分を生徒達に求めていく。
  - ①整合性・・・探究の目的と解決の方法に矛盾がないかを自分でモニターする。例えば、3年生が自分達のキャリアを考え、付箋紙に書いて分類していた。それを、先生が言うからではなく自分達の経験したことを言語化して分類すると、自分達の足りない部分ややるべきことが見えてくる。この方法は自分達の目的を明確にするためのよい、と自分でモニターできるようにする。
  - ②効果性・・・効果を知ること。自分の探究は自分の資質・能力を使っているかをモニ

ターする。

③鋭角性…探究するポイントは焦点化して鋭角に掘り下げる。マニアな感じでいいので、自分がやりたいことをとことんやっていく。

④広角性…いろいろな人や社会とつながることも見据える。マニアであっても、そこで蛸壺化せず、その価値をいろいろな人達と共有できることも意識する。

この4つが『高度化』であり、小・中学校とは違い高校生に求めていくもの。

・『自律的』とは、自分達で全部できるようにしようということ。

①自己課題…他人事ではなく自分をターゲットにし、自分のことを課題にする。

②運用…探究の過程で、行ったり来たりしながら自分でコントロールする。ちょっとまだ足りない、戻る、ということをしていく。

③社会参画…それを社会で活かそうとする。

これらを自分自身でモニターしながらやっていくのが『自律的』ということ。知的障がい生徒には難しいこともあるかもしれないが、1～3年生の生徒が取り組んでいる探究は、ほぼ重なっている。本当にできるようにしていこうということであり、先生たちが言うから仕方なくやるということは絶対ないようにしていく。

・「探究」とは何か。「探究」は、主語が子ども達。

①課題の設定…児童、生徒が、自ら様々な場面で学習の課題を設定する。教師が設定するのではない。

②情報の収集…自分の勉強したい内容は自分で決め、すぐには解決できないので、何が足りないか、必要な情報を見つけて集める。

③整理・分析…集めた情報は、使えるものと使えないものを自分で整理、分析する。

④まとめ・表現…頑張ってもある水準までしかいかない。「ここまでできた。」とまとめつつ、まだ足りないからこういうことをしなきゃ、と行ったり来たりしながら最適解を求めて進めていく。この①から④をいろいろな場面で自由に使いこなすことを「探究」という。

・幼稚園、保育園の子どもも毎日探究している。自分で遊ぶ内容を決め、道具を持ってきて場所を決め、とことん遊んで挫折したり作り変えたり友達と先生に相談したりしながら続けていく。小学校では自分で課題を設定することを、ほぼ「総合的な学習の時間」で行っている。中学校での探究は、「総合的な学習の時間」「社会」「理科」「道徳」で行う。今、社会科と理科では、教師は課題を与えず、自分達で学習する。高校は、社会科系、地理・歴史・政治経済・公民など全部、理科も理数探究も探究。これらは先生達が課題を与えてはいけない。自分達で学習計画を立てて取り組むもの。

・学習指導要領が改定される前から、リクルート社が出しているキャリアガイダンスやフリーマガジンで「探究」について特集があった。学習指導要領が始まる時には、NHKのホームページで「高校教育が変わる」「キーワードは探究だ」という特集があった。総合的な探究の時間が教育課程の中心になっているから、教えるのではなく自分で気付く、自分で学ぶことを子ども達にしていけないといけないということが、この時から話題になっていた。また、2025年はAI新世代元年と言われ、ネット上には嘘写真・嘘動画が貼り巡らされている。これは7年前に予告されていて、こういう時代になると自分で考えることができないと生き残れない。いかに自分で気付いて自分らしい考えを

作り出すか、という時代になってきている。

#### 4 学習指導要領から ～全体計画について～

- ・学習指導要領では、生徒が全部決めるといっても、学校側での計画が必要であり、鶴高養でも「全体計画」、それを基にした「年間指導計画」、この二つを揃える必要がある。
- ・全体計画の第一の目標は、学習指導要領に示されている「探究の見方・考え方を働かせ…」という目標、それと各学校（鶴高養）の学校教育目標、その下に各学校において定める目標、これは鶴高養の総合的な探究の時間の目標。その下に鶴高養の総合で育てる資質・能力は何か、どういう内容を扱うかという計画を入れて、実際の授業を組んでいく。全体計画があり、それに沿って年間指導計画を作ることになっている。
- ・解説に出てくる「探究課題」は、生徒が設定する課題ではなく、学校が予め設定する課題。単元が始まる段階で、生徒に概念として分かってほしいことを見えるようにするのが探究課題。先生達で定めて共通認識するもの。鶴高養の1年生と2年生では、内容が似ていたけれど水準が違っていた。そういうことを探究課題として書き分けておく。
- ・学習指導要領解説に示されている探究課題は、「Ⅰ 現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題」「Ⅱ 地域や学校の特色に応じた課題」小・中学校は「Ⅲ 児童の興味・関心に基づく課題」となっている。高校では進路にかかわる課題がある。具体的な探究課題を文章で書いておくことが示されている。（解説73ページ～）
- ・探究課題を学ぶと生徒の資質・能力が育ちそうだと思うものを設定する。鶴高養では、職業や自己の進路に関する課題だが、「1年生の探究課題はこうだ、2年生はこうだ、3年生はこうだ」と示しておく、先生達が入れ替わっても水準が安定する。
- ・気仙沼での具体例を示すと、防災について、今の中学生や高校生が、「自分達にはどんな貢献ができて、何ができないか」をリストアップし、理想はあるけれどできないのでそれを埋める活動を自分達でやる。災害時に高齢者を助けるための具体的な方法を調べると、様々なズレに気付いて、やるべきことが山のように出てくる。多くの人の協力を得る必要がある。こうしたことに自分たちで気付いて取り組むように、気仙沼の先生達と話し合った。とにかく、ズレに気が付くようなことを先生方があらかじめ探究課題として設定しておく。実際やってみると全然できなかった、知らなかったというズレを明確にして、どうやって埋められるかというところが内容になり、それをリストアップしていくと計画が決まる。
- ・気仙沼や石巻では、2011年に東日本大震災があった。もし今被災したら、中学生や高校生が避難場所で活躍しなければならないがデータが残っていない。だから、当時の中学生や高校生に、自分たちで連絡して話を聞きに行くと、どこの資料より生々しい話が出てくる。それを自分たちで整理してマニュアルを作ろう、と総合で取り組んでいる。
- ・もう一つ、気仙沼は復興の場所なので結構外国人がいる。その人達の安全のためにも避難場所で英語の勉強もしなければならない。専門用語も翻訳しておかないと使えない。また、イスラム教徒は豚肉を食べられない。避難場所でその人たちに、豚汁や芋煮は出せない。そこを考えて準備しておく必要があることを、中学生とか高校生が気が付いていく。そんなふうにして実際に、避難のやり方などを考えて取り組んでいる。

#### 5 学習指導要領から ～情報の収集について～

- ・総合的な探究の時間と言えば「調べ学習」というイメージはないか。AIを使うと「調

べ学習』とは、与えられたテーマや興味ある事柄について自分で情報を集め整理し、まとめ発表する学習方法です。」と出てくる。しかし、学習指導要領に「調べ学習」という言葉は1回も出てこない。それは何を意味するか。そこに言葉の齟齬が起きていて、「情報の収集」は、「調べ学習」と同じだと理解した人がたくさんいた。実際の「情報の収集」とは、解説によると、生徒が課題を設定した時に、必要に応じて観察したり、実験をしたり、計画をしたり、調査したり、観測をしたり、追体験、つまり「もう一回やらなきゃ。」ということを生徒が行うこと。先生が言うからネットで調べるのではない。あくまでも生徒が設定した課題の解決に必要な情報を収集することで、教師が「調べなさい。」と言って「調べ学習」をやることを意味していない。

- ・解説の具体例から、中学校の学習指導要領には、「例えば、地域に多くの観光客が訪れることから、生徒は『地域のよさとは何だろう』と考える。」とある。鶴岡にもたくさんの観光客が来るが、子どもたちに、「いったい何が魅力だと思う？」と聞いてみるとよい。子どもたちの思っていることと、観光客や様々な地域の専門家の人に聞いたことは絶対ズレている。自分たちの地域を外部からの目線で見ることによって、そのズレた良さ、「そうか、そこに良さがあったのか。」ということに気付ける。
- ・南陽市の沖郷中学校の生徒は、観光客が増えていることから、「なんでここに来るんですか？」と聞いたら、台湾で放送されているドラマに登場する「聖地」だった、ということが分かった。また、解説には「郷土芸能」というのがあるが、そこに自分たちが弟子入りしてみようかな…と考える。そうすると、また違う良さを知る。こういうことが繰り返されていくことによって自分たちの地域を見直していくと、自分たちすら知らなかった地域の魅力を、どうやったら本質的に人に知らせることができるか、「聖地だ」というだけではなく、「もっとこの地域の凄さを教えたい。」となっていく。
- ・沖郷中学校の生徒たちは、観光客に「困ることはないですか。」と聞いたところ「ここが聖地だと示す英語の表示があれば、自信をもって写真が撮れる。」「どの旅館も英語が通じなくて困った。」ということが出てきた。そういうところで、生徒たちは自分達に何かできないか、と考えた。データを集め、「掲示を付けていいですか。」と市に頼んだり、「何か自分達に協力できませんか。」と旅館に聞いたり、そういうことに取り組んでいくための情報を集める。つまり、ネットでは絶対分からないことをやっていく。自分達で課題を見つけ、それに対して自分達が「知らなかった。」「そうだったのか。」「じゃあもっとしなくちゃできない。」ということが、「情報の収集」である。

## 6 プロジェクト型学習について

- ・特別支援学校について勉強した時に、広島県立教育センターに、総合的な探究の時間について、「プロジェクト型学習の進め方」というものがあった。生徒が自分達で何かを成し遂げようとするプロジェクトで、成功するかどうかは問題ではなく、「そうだったのか。」ということについて、自分達から取り組んでみる学習。
- ・南陽市の中学生だったら、外国から来る観光客に、もっとこの地域を好きになってもらうためにはどうしたらいいか、というプロジェクトを組んでいく。「英語の表記を作ろう。」「旅館を助けよう。」「地域の伝統工芸を見せるイベントを英語でやろう。」など、いろいろ考えていく。特徴は、とにかく行ったり来たりする。学習指導要領の「探究における生徒の学習の姿」にある図の矢印のように、くるくるきれいには回らない。何回

も壁にぶち当たり行ったり来たりする。そこには、知的障がいの生徒たちに必要な要素が全部埋め込まれている。

- ・「特別支援教育」8月号の、「総合的な学習（探究）の時間」の特集に、福島県立猪苗代支援学校の高校の生徒達が、「プロジェクト型学習」をやっている資料があった。プロジェクト「Iina-BORN」と名付け、地域企業の「A食品」と連携しコラボ食品を開発し、その商品を流通させることで、地域活性化を目指す地域プロジェクト。起業（アントレプレナー）をやってしまう。知的障がいの生徒達で、このプロジェクトを行う計画を先生たちが立てた。自分たちの地域の強みと弱みについて、「田舎だからどうしようもない。」と言っていたが、頑張っている「A企業」があることを知り、見学に行き魅力を発見した。そこでインタビューをしたり、「こういうのはどうですか。」という提案をはねられたりして、何回も繰り返して、「うまくてごめんな山菜」というものを作り上げ、実際にA食品からアイデアを採用された。それをラジオで紹介するために、番組作りに協力して記者会見でのインタビューを受け、コラボ商品発表会などを企業の人と一緒にいった。とても魅力的だと思える。
- ・鶴高養の1～3年生の学習も面白いけれど、そこに「プロジェクト型学習」のようなものをスタートしていてもいい。自分たちのズレを見つけて、自分たちの足りないところ、逆に言えば、「もっとこうあってほしい。将来、未来、地域に対して自分たちが何をしたらいいの？」ということ、実際プロジェクトに動かしてみること。

## 7 深い学びについて

- ・「宣言的知識」と「手続き的知識」について。「宣言的知識」は、教科書などに出ている言葉。「手続き的知識」は、自分たちで言葉にできるやり方。
- ・県内の特別支援学級の小学校の算数の授業で、1リットルなど体積の勉強をした後、先生が児童を理科室に連れていった。リットルマスや計測器械があり、さらにペットボトルをたくさん用意していた。「これで、ぴったり1リットルってできるかな。」と先生が投げかけたところ、児童は、失敗したり、やり方を変えたりしながら、ペットボトルが500ミリリットルだということに気が付いた。自分達でどんどん試していき、やかんが何リットルかを調べようとした時には、どのペットボトルを使えばよいかも分かるようになっていた。一つの量感が分かると、手続き的に知識が安定してミスがなくなる。ただ、一日二日経つと忘れてしまう。これを言語化して自分でプログラムを作ることができるようにするのが「深い学び」。つまり、「宣言的知識」を学ぶだけでなく、自分で確かめる知識のようなものを自分で見つけ出すと、違う場面でも活用できる。そうして使いこなせるようになると、「宣言的知識」「手続き的知識」を超えた「概念的知識」といういつでも使える知識になり、それが深い学びになる。
- ・同様に、小学校の特別支援学級（4、5年生）の総合で、「ハロウィンプロジェクト」をやっていた。「ハロウィンって何だっけ?」「去年どうやったっけ?」「どういうことしたいかな?」と全部思い出して計画を立て、お店に行って、食品や食材の写真を撮らせてもらい、パンフレットを切り取って値段を書く。次に、お菓子の材料を買いに行くが、その前に自分達で買い物の練習をする。予算内で、必要な物を選んで買い物をし計算が合っているか電卓を使って確認する。買い物をする時には、予算と必要な物を見定めて、きちんと電卓を持っていってお店の人に迷惑をかけない、ということ、全部

自分達で考えた。先生はそれに付き合っているだけ。これを繰り返して、実際にハロウィンは大成功した。「買い方はこう」「レジの使い方はこう」という宣言的な知識だけではなく、どうやったら身に着くか、自分たちでプログラムを作って試し、本当に買い物や調理、パーティーをやるところまで自分達でやっていくと、「そうか、楽しいイベントって、こうやったらできるんだな。」という概念が作られていく。これが、「深い学び」になっていく。

- ・「深い学び」、「探究」というのは、教えられるのではなく自分達で気が付いて自分達でプログラムを組んで、概念的知識を作り出すことを積み重ねることにある。そう考えると、知的障がいの子たちは、これをやればやるほど身に付くのだと思われる。断片的な知識になりがちだからこそ繋いでいきたい。そのためには、失敗してもいいから繰り返し自分達のプログラムを試してみるということが大事になってくる。
- ・庄内農業高校は、10年程前に山形県教育委員会がやっていた「郷土 Yamagata ふるさと探究コンテスト」でグランプリを取っている。農業の実技をする玉川農場を、地域の人達を通して有効利用する「農福連携プロジェクト」というものを考えた。農場と地域の福祉を繋げられないか、という取り組み。広報誌での呼びかけに集まった10人の高齢者との話し合いから始まった。最初は、農園でお年寄りを喜ばせるイベントであったが、そこからどんどん広く多くの人、地域の活動へと繋がっていった。いろいろな野菜や花を育ててみたい、釜戸を作って芋煮をやりたい、新聞に出たいなどの高齢者の願いを受けて様々な計画、準備をして、自分たちの勉強してきた経験や知識を生かしながら実行していった。また、高齢者の方からアドバイスを受けて施設や一人暮らしの人へ野菜を届ける、子ども食堂でもボランティア活動を行うなど、最初のもくろみとは違うプロジェクトへとどんどん進んでいった。そして、地域のイベント（食文化創造都市のイベント）に招待され出店するまでに活動が広がっていった。プロジェクトの発表で、自分達は農業の仕事に就く気はなかったが、社会人としての自覚、自信が出てきた。いつも学んでいることが実は人にすごく貢献できる。人間力が培われた実感がある。」ということを発表して全国の新聞にも取り上げられた。
- ・高校生の探究の全国大会で6位になった、山形中央高校のプロジェクトについて。ドイツ発祥の「カタン」というゲームがあるが、彼らは「カタン」の会社に交渉し、このゲームを山形版とか蔵王版などに作り直し、許可を得て子どもから高齢者まで遊べるゲームにして地域興しをしている。山形市教育委員会からも奨励され、引きこもりの社会人の人達が家を出るプロジェクトをプロデュースした。高校生が作ったゲームならやりたいと、2か月家を出なかった社会人が集まり、知らない人同士が、このゲームに携わっていた。そういうことを今、高校生がやっている。とことん好きなゲームを研究して、地域に貢献できることはないかと考えたもので、大変可能性があると思える。
- ・知的障がいの生徒達に、難しいこともあると思うが、ズレを基にして、どうやったら埋められるか、プラス、今の強みで何をすると人を喜ばせられるか、実際その仕事ができるか、といったプロジェクトを加えてみてはどうだろうか。ぜひ、鶴高養の皆さんにもそういうプロジェクト型で、将来に繋がる自分の自信となるものを作ってもらえるといいと思っている。

文責 研究主任（佐藤）